

部会報告（要旨）

第一教学部会

座長 三原正資

問題提起 竹内祥起

運営 西片元證・片野博義

他スタッフ 小倉光雄・都 龍張

第一部会は、教化学の基本概念の確認とその応用事例が討議された。第一日日の内容は、問題提起者より企業経営者の指導と檀信徒の教化指導との実践報告を軸に、教学の現代化と応用の具体的技術が提示され、参加者が意見を聞く形式となつた。

問題提起者は、現代の宗学は近代合理主義の影響のもとにあることによって問題が生じているのであって、時代の要請する日蓮教学としての教化学の確立が現代の課

題であると提案された。また、教化にあたっては、理性的に説明し、感性で納得させるように説明し、意志的に理解できるようにして行動にうつせるように教化し、教学で信者をつくるべきと強調された。

まず応用事例として、檀信徒教化にかかわる大阪市民大学講座と経営者管理者の教育事例と僧侶教育が話しあわれた。

宗務所主催の大阪市民大学講座が月一回開催されているが、講師は若手の僧がつとめ、三分の一が本宗の人、三分の一が他宗の人人が参加している。カリキュラムを作成し、教学を軸に内容のレベルは高いものを話していると報告された。檀信徒養成については、因縁がちがうので、一段仕立てとして、檀信徒を従来の檀信徒と教学による信徒を作る必要があるという。教学を知れば教化したくなり、いい話は他人にも話したくなる姿勢を重視すべきであるという。また、檀信徒は教学を聞いたがつていることを自覚しなければならないことが知らされた。そして、日蓮聖人との出会いを求め続けることが信仰で

あり、日蓮聖人とは教義であることが話しあわれた。

た人の思想により変わることが話しあわれた。

企業経営者に対する教育講習については、企業の欲するものを日蓮宗として作ることが急務で、それが教化となり、ジャンルをこえて適用する教学が求められることが話された。そして企業の教育に僧侶の活躍が望まれていると報告された。企業教育には、現実に意味がないと価値をもたず、社会教育としての教学の構成が必要であるという。企業経営者には立派な思想をもつ人間となりその価値による感化によって人が働くので、経営者自身が尊敬されなければならないということを教えていふといふ。また思想レベルの高い人に才能ある人が集まるということを明かした。

僧侶教育については、第一に僧侶自身が自分で尊敬できる人を探し求めることが大事であり、自分が尊敬できることを考えるべきであることが話し合われた。それは、人間は出会う努力によらなければ変わらず、出会つ

第二日目は、教化学の概念の再討議となつた。教化学は、教化術や教化法ではなく、教化の学的大系をつくるべきであると発言があり、教化学とは基礎学としての教學と応用学としての教化学とに分けられると説明があつた。宗学を把握し現代的に展開すれば基礎学としての教化となり、応用学としての教化学は現場の人でなければ出来ずとして三秘をもとに応用学を説明した。

それに対し、教学がむずかしいから現場に役立つ教化術を工夫すべきという教化学は誤りであつて、教化学とは、宗学の見直しの可能性をみるとあって、簡単に概念設定すべきでなく、七百年來の宗学を再構成するくらいのものと考えるべきとの意見があつた。そして、日蓮聖人の価値を世界思想史上で知るべくであつて、そのための価値の座標軸をつくるべきと強調された。

続いて、教学の言葉を前面に出さず、別の言葉で語るべき術を考えるべきとの意見が続き、大阪の慰靈祭典が、教化学の実際と応用の具体例との意見も続いた。最後に、

教学は教義的言葉で表現できても自分のものになつたといえず、自分自身の生活実感のレベルで納得できる教義

教学用語が解説できないといけない、という意見があつた。

遷、ダーナ（檀那）と布施について語られ、現代における

檀家制度の問題点として次の四つが指摘された。

1、経済的側面における問題

2、檀家の信仰を育成する上での問題

3、宗教の個人化と檀家制度の崩壊

4、宗教法人に対する社会の批判的風潮

今回の部会においては、教化學は單なる布教技術ではなく、教化の実際の中から本来の教学への回帰がみられることを語り合つたといえる。

（片野博義）

（2）檀家の概念

各寺院において微妙に違いがあり、一般的には寺を支える家といった意味で使われてきたということで意見が一致したが、さらに檀信徒という言葉を分けて、檀家と信徒を区別した上で檀家の概念を論じた。

- 1、墓が寺にあるのが檀家
- 2、護持会費を納めているのが檀家
- 3、納骨あるいは位牌を納めているのが檀家
- 4、墓があつても遠隔地にいるなどの理由で勝手に他寺院にお葬式を依頼しているのは檀家とはいえない、準檀家とすべきか

小川順道師により、江戸時代に始まつた檀家制度の変

ここで4については、教化上も道義上も他寺院の檀家

の扱いはその寺院との連携を保つことが望ましいとの意見が出された。

次に檀家制度の是非について論ぜられた。

現時点において、宗内寺院のほとんどは教化活動の上でも寺院の維持経営の上でも檀家制度に負っているところは大きく、檀家制度を否定すべきではないとの意見が大半を占めた。しかしながら個人を個人と認めるところに信仰の根本がある以上、個人を最重視しない家を中心の檀家制度は弊害が大きいとの否定的意見も出た。

(3) 檀家制度の悪い点

- 1、個人の信仰育成を阻害する
- 2、経済的安定の故に住職の怠慢を生む
- 3、新しい檀信徒の入り込む隙がない
- 4、寺院間の繩張り意識を増長させる

以上悪い点が論ぜられたが、これを逆に見ると利点ともなる。すなわち、

- 1、家を中心の故に信仰の相続が容易である
- 2、寺院の収入の安定化がはかりやすい
- 3、寺院を中心とした組織の結束が強い

4、住職に繩張りを守る意識が強くなる
これらの欠点を取り除き利点に変えることが檀家制度を理想的なものとするため必要とされた。

次に旧来の檀家制度に付随する問題が取り上げられた。
① 檀家への寄付要請についての問題

大塚師より寄せられた四国の真言宗S寺に関する報告で、寄付の要請が強要と受けとめられマスコミに連日取り上げられ社会問題となつた事例。これに関して、日頃からの寺檀の意志の疎通こそが大事で、また住職自身先頭に立つて寄付する態度を持つこと、寺院は法人であることを広く内外に示すことが必要との意見が出た。

②お墓・戒名に関する問題

自身墓地の新しいシステムを考え安穏廟を立て、絶家墓・移転による放置墓・離婚女性の墓等の問題解決に尽力する小川英爾師の事例報告を中心にして論じた。墓地としての土地自体に限界がある上に、子供のいる家が減少している現状、姑あるいは夫とは同じ墓に入りたくないといふ嫁、後妻が先妻と同じ墓に入つてよいかなど問われる問題が多い。お墓・戒名については本来の意義より、

世俗の欲や見栄が先行しがちである。結論として、お墓

さらには戒名に関して、その意義と必要性を充分説き広めるとともに、現代社会のニーズを知つて今後の在り方を見い出す努力を忘れてはならないとされた。そしてその具体的方策の一つとして、宗門は早急に無住寺院との墓地をどう利用するかの対策を立てるべきだと、強く要望された。

(4) これから檀家制度について

檀家制度そのものだけをいじってみても、それだけに頼っていては生活様式の多様化した現代社会に生きる個々人を教化することはできない。檀家制度の利点（信仰の相続）を生かし、欠点たる個人の信仰の育成を補う努力が肝心で、精神的支柱を失ったといわれる現代こそ本宗の教えがその支柱となることを示すチャンスであると心得、檀信徒一人ひとりの生のままの生活に積極的にかかわっていくことが我々の役目であろう。それによつて、個人の信仰を基礎とし、家族ぐるみで、お寺づくりに参加できる、新しい檀家制度の確立が可能となるとの結論が得られた。

(5) 来年度の課題

要望として出た「無住寺院の活用化を考えよう」を来年度のテーマとして意見がまとまり、無住寺院の墓地利用、都市寺院との連携、新寺建立と無住寺院の移転等、問題点があげられて来年を期することとなつた。

(植田觀樹)

第三法器養成部会

座長 新井貫厚

問題提起 豊田正通

記録 田島辨正

運営 原頭彰・内山智修

参加者 十七名

はじめに、当部会における前年度までの経過説明を兼ねて、法器養成に関する宗門機関の概略が新聞智照上人から解説された。あわせて、今回のテーマである信行道場を取り巻く諸問題が参考までに示された。

○現行の僧風林をさらに充実拡充するとともに、できれば全入制の導入が望ましい。

○僧風林から信行道場までの空白期間に、青年僧風林等といった何らかの教育機関が必要。

○信行道場への入場に先立つて行なわれている読経試験の地域レベル差を是正することが望まれる。

○信行道場修了後も、引き続きレベルの向上を図るべく専修道場のような機関を設けるべき。

○現在、僧風林から順次改革を進め、カリキュラムの整備やテキスト作りを行なっているが、未だ十分に改革案が具現化されてはいない。

これらは、今後の検討課題として継続的に話し合っていくものとし、今回は前年度に統いて法器養成の最も軸となる信行道場の問題点を探る旨が座長から示された。これを受けて問題提起者の豊田上人より、昨年度は主に道場生の資質等について検討したが、今年は指導者たる能化の立場を中心に話し合つてみたいとの意向が出され、次いで以下の具体的な研究課題が提起された。

① 訓育に当たるスタッフの人選について

- ② 能化として備えるべき必要な資質について
③ 子弟教育に対する考え方や取り組み方について
④ 教育の任に当たる教師の養成について

つづいて、この夏に第二期信行道場の主任を務めて戻られたばかりの井本学雄上人から、ご自身の体験や道場生へのアンケートとともに信行道場の実状が報告された。

この中でスタッフに関しては、チームワークと指導能力のバランスがよかつたなどの好条件、および毎晩の職員会議における綿密な打ち合わせが指導の面で大きく功を奏したことが強調された。またアンケートからは、道場生が職員に望む声なども参考に紹介された。

この後、参加者による自由な意見交換が始まつたが、今回は全十七名中八名が信行道場の主任または副主任経験者ということもあって、具体的な指導内容や現場の実状に踏み込んだ活発な議論が展開された。

①について

- スタッフについては場当たり的に選ぶのではなく、もっと基準を明確にした上で、できるだけ長い目で見た人選が必要だろう。

②について

に検討すべきだろう。

- 自ら教師としての姿勢を正せることが肝要であり、特に主任には信心が根本に求められる。
- 指導する者は、その人間性をさらけ出しての触れ合いを重視すべきであり、安易に無意味な罰則を用いることは避けるべきである。特に唱題行や読経を罰として行なうことは、指導者の信心が疑われる。
- ③について
- 世襲化等によって師弟の意識が低下し、道場入場者の低レベル化をも招いている。師匠はもつと責任感をもつて弟子の教育を行なうべきだ。
- 本来師匠が教えるべきはずの読経等も、現実には教育機関に依存されている。そこには、むりやり子息を後継ぎにする師匠側にも問題がある。
- 何よりも道心のあるなしを問いたい。とりわけ寺院出身者に意識の欠如が見受けられる。

- 大なり小なり感動をもって修了した道場生に対しては、その後も生涯教育の一環として、感動を喚起するシステムが欲しい。

④について

- より充実した道場を目指すには、指導者の養成は急務である。布教研修所出身者の起用など以前から考えれば改善されてはいるが、さらに専門の研修システムを設置するといったような努力が必要だ。
- 定期的に毎回の主任・副主任を集めて意見を聞く場などもあってよい。一歩進んで「主任団」という組織も検討してみたい。
- 宗門全般に、僧風教育に対する意識が低い。これが指導者不足にもつながっているように思う。宗会をはじめ、全体の関心を高める努力も必要だろう。
- ⑤その他
- 道場初日は、主任からじっくりと道場生に心構えなどを話す時間が欲しい。全般にカリキュラムには、もっと現場の声を生かしてもらいたい。
- こうした問題をクリアしていくには、一貫した教育システムの確立が必要だ。特に道場入場以前の僧風教育が欠如しており、僧風林への全員入場等も早急

- カリキュラムには、職員と道場生とが人と人として触れ合える時間を多く取り入れてほしい。そうしたことが感動と信心を芽生えさせるきっかけとなる。
- 読経については、訓読も含めて読み方の統一がどうしても必要だ。また、読経テストにおける地域差・取り組み方の違いも問題であり、全国的に基準を均一化していくべきである。
- 読経テストについては、宗立学寮生の免除や僧風林との関連など検討する課題も多い。
- 唱題行の方法など修行の形式について、さらに検討していくほしい。
- 信行道場の全額無料化は果たして良い結果を生んでいるのかどうか、再度見直してみてもいいのでは。
- 道場生のレベル差に関しては、信行道場の開設方法や回数など多面的に検討して、レベルに合わせた教育システムも考慮すべきではないか。
- 入場前に実施している読経研修を、レベル格差の是正に向けて積極的に利用してはどうか。その場合、法要式の基本面も含めて考えてほしい。

第四世代別教化部会

(田島辨正)

座長 吉本光良
問題提起 進藤義遠
運営 河崎俊栄・太田鳳苑

○こうした話し合いで出た意見を具現化するための専門機関を設置・充実させることが必要だ。また、主任・副主任経験者による話し合いの場を継続的に行なっていった方がよい。

以上のはかにも、信行道場の充実化を求める意見やプランが多く出されたが、今後これらをじっくり検討し具体化していくためには、是非とも継続的な研究機関が必要であり、あわせて僧風教育全般にわたる諸問題を改善していくためにも、できるだけ早期に実現させたいとの考えで一致した。なお、次回の中央教研では青年僧風林に関して話し合ってみようとの方向も打ち出された。

記録 大島啓禎

参加者 十六名

初めてに参加者の自己紹介があり、ついで問題提起者の

進藤上人より、この部会が青少年教化から世代別教化になつた経過が報告された。さらに「青壮年を寺に集めるために」との設問に沿つて、自坊での体験発表がなされた。

発題の要旨

檀家は八十五軒、十年で人口が倍になつた人口急増地で、宗門の平均的寺院。青壮年とりわけ壮年を対象にした事業は、

一、無尽会（頼母子講） 九名、平均三十七歳の男性、お会式に参加した青壮年を対象に

二、朝粥会 二十名、平均四十五歳の男性、未信徒（住職の知り合い）を対象に。月会費を積み立て、

公開講座を開催している

三、写経会 十名、平均五十歳の女性、研修旅行も行なう

成果（メリット）としては、

○檀家以外（未信徒）のつながり

○住職の人脈拡大、地域での存在感が高まる

逆の成果（デメリット）としては、

○寺族の負担が大きい

○「自分たちの寺」意識が強い軋轢となるので、檀家の
人にも加わってもらう。

今後の課題としては、

○マンネリ化をどう打開するか

○文化事業と信仰との関わりは

○寺をどこまで開放するのか

以上の問題提起に関して、参加者からは、呼びかけ・

組織づくり・運営・内容などについて活発な質疑応答があつた。なお進藤上人より既存の施設を利用して「やすらぎの里」を人の意識の中につくっていく活動が提唱された。

具体的には、九月に発会する「いのちの銀行」で、二
十人ほどの各専門分野の人々に参加してもらい、電話相談室を開設する。電話相談には、①話を聞き受け答えする即答型、②よく調べてから答える回答型、③専門家を

紹介する中継型、という形式があり、中継型を主体とする。また環境問題に対し、各自の現場での体験報告と問題の話し合いを行なうこと、そして次代を担う青少年の育成、という三本柱を考えているとのことであった。ついで全体での討議となつたが、以下は、発言内容の要旨である。

一、組織化の問題点を出し合う。

○農村地では、種々の計画は持つてはいても、なかなか実行できない。婦人は集まつても、男性が集まらない。組織化ができなかつた。

○寺の開放がどこまでできるか。

○年をとると外に出るのがおっくうになる。

○寺族の負担が大きい。

○個々に忙しすぎて、できない。

二、世代別に分けてどういうことができるか。

○寺院・公民館活動に中学生・高校生・大学生・青年団が来ない状況をいかに克服するか。

①少年少女には、子供会・修養道場・日曜学校。②中学生・高校生には、サークル・クラブ会の合宿育成

会（PTA）。③青年には、スポーツ・趣味などを通して合宿・相談などによって交流を深める。

○檀家名簿をつくり、入学や成人などの祝い事、結婚式などをして寺に集める。白寿や米寿などは、宗門から表彰して祝つてあげるとよい。

三、青壯年の教化について、どのようなことができるか
(特に信行会)。

○和讃を取り入れ、比較的若い嫁の層に呼び掛けて広がりを持つことに成功した。

○昭和五十年より靈跡参拝を行なつてている。

住職が勧めるよりも、総代やその同級生が幹事となり、勧めることによって大勢の参加が得られる。檀家どうして勧め合い、檀信徒の中からリーダーが出ることによって、まとまりがよくなるのではないだろうか。

○団參は、大きな団參（遠方）と小さな団參（九州内）を年一回ずつ行ない、年をとつたら夫婦そろつて参加するように勧めている。また、和讃について

は、熊本でも三年前から寺庭婦人を中心に行なっており、最近は檀信徒も参加している。毎月本妙寺を会場に信行会を開催し、老若男女を問わず、和讃に参加している。

○「立ち渡る」や仏教贊歌を取り入れると、とてもよい。若い方は、少し練習すれば、自分でも伴奏できる。

○檀徒が買ってきたテープにより、和讃を始めた。太鼓が打て、声が出ればということで続き、皆が楽しむということが大切である。

○世代的に人の前では歌えない人もいるので、共に歌うという点に新しい楽しみがある。

○讃仏歌を歌うために、伴奏だけのテープをつくってほしい。特に若い人が信行会に参加する上では、必要である。

四、この世代別教化部会を、今後どうするか。

○青年・壮年などの年代別、また関心がある行事別に話し合うべきだ。実際に行なっている人が集まり話す方が、より具体的となる。

○社会は生きており、時代と共に発展する青少年に対し、継続して対応を考えていくべきであるから、この部会は続けるべきである。各地区ごとに、その地域の青年の要望を調べ、吸い上げ、検討する必要がある。

○若者の要望を検討し、世代別目標を立てる。

○来年の中央教研で、讃仏歌や和讃を実際に取り入れていただきたい。

○来年の中央教研には、各地区の活動を掘り起こし、そのカリキュラムを持ち寄りたい。

○何年か先を見越して、たとえば讃仏歌の普及、また青年教化についてというように、年ごとのテーマを決め、積み上げていく。

○教化の対象となる世代とその材料・カリキュラムを明確にしていく方法を考えたい。

(河崎俊栄・大島啓祐)

第五教化伝道ネットワーク部会

座長 岩永泰賢

問題提起 龍沢泰孝・波澤光紀

記録 伊藤立教

運営 田口学正・波澤光紀

参加者 十八名、オブザーバー一名

問題提起に先立ち、伊藤立教師から、地域教化センター（現二十六カ所）の現状と地域教化センター事務連絡会議について説明があった。参加者自己紹介で、参加者のなかに十四教化センターがあり、一管区には設立予定のあることも話された。

問題提起「異体同心のネットワーキング」を波澤光紀師が要旨読み上げ、これができるかどうかはここでの参加者のやる気にかかるとしていた。

別紙で配布された資料をもとに、

関係をおき、定期的に各種情報を送る。また図書資料などの問い合わせ、回覧・掲示板の役目もはたす。
②パソコン通信段階（電話網による）——システム構想、ニーズの調査・分析、データベースの作成。

について説明があった。

情報化は手段であり、目的とするところは宗門内共同意識をもった活動の改善と活発化である、と提起した。

ここでオブザーバーの立正大学庵谷行亨教授から、「メディアの活用がなければ、教団の将来はない」という記念講演内容への共感がよせられ、立正大学でもコンピューターの活用が図られていることが私の意見として話された。

つきの問題提起「コンピューター化された御遺文を体験する」は、龍沢泰孝師が開発に尽力された御遺文CD-ROMの実際を、別室に設置された装置で実体験した。以上をもとにした第二日目の討議では、

- コンピューター・ネットワークのメリットと弊害。
- 昨日のは理想の姿。資料作成と他センターの資料

も見たい。現宗研が中心となつて資料一覧表を流してほしい。まず、実動してほしい。

○ネットワークは中心がなくても出来るのではない。中央・地方をわける必要はない。パソコンは大きな掲示板。データベース作成委員会とでも言うほうが、言葉がやわらかい。中央という言葉のひびきの弊害。

○核は必要だと思うが、現在は寺院間のネットワークづくりから。

座長の部会別報告の要点は、次の通り。

①CD-ROMコンピューターとパソコン通信の実

地研修により、情報機器と社会の認識を深める。

②記念講演の趣旨「現代メディアを活用出来ない教団は、将来的な発展、教線拡張は望めない」に従つて、コンピューター、パソコン通信の導入の必要性を認め、当局は、教化センター等を含む各地とのネットワーク化、中央のデータベース作成のための中央教化センター設立のために、最大の

③そのさきがけに、第五部会を継続的に活動させ、機会を得て審議を重ね、とりあえず、部会責任者龍沢師を中心に寺院間のネットワーク化を図る。参加教師、ことに子弟・信徒など、興味のある方々の参加をもとめ、参加希望者のリストアップと今年中のネットワーク化を図る。

④各地の教化センターのネットワーク化の必要性を認め、その手始めに、第五部会が中心となつて教化センター事務連絡会議を通じ、資料・情報の交換、それらの一覧表の作成など、波澤師を中心取り組んでいく。

⑤高度な情報機器・メディアにとらわれて、教師本来の現場の布教体制にかけりが出ないよう、教師の資質の向上と教師間のネットワーク（心つながり）を見つめなおし、将来の情報化社会に対応できる自覚を深める。

（伊藤立教）

第六社会問題部会

二、患者へのアプローチリ今、一步入れない。

三、医療従事者(スタッフ)へのアプローチリ色々な工夫

四、今日の医療問題(脳死・尊厳死等へのアプローチ)
リどの様に考えていくか。

座長 渡部公谷
問題提起 蟹江一肇・奥田正叡・柴田寛彦
勝呂昌信

運営 山口裕光・高橋謙祐
記録 高橋謙祐・望月兼雄

第六部会では、昨年に引き続き医療問題に焦点を当て、

いっただ。

基本コンセプトとして、「病人に対する日蓮聖人の教化、現代社会の中で僧侶が病人と関わりあっている事例、新宗教が病人と関わりあっている実態」を取り上げ、これをさらに細分化し、

一、医療問題に対する教典・教学的な基礎づけリどの様なアプローチをしていくべきか(日蓮教学的なアプローチ)。

○釈尊は古代インドの思想(心身二元論・多元論)に對して、心身一如という捉え方をした。心があつて身体がある。その逆もしかりである。

○しかし、靈魂は浮遊し人間の病気につながる原因に

五、新宗教と病(医療)との実態・現況

六、日医研(日蓮宗医療問題研究会……仮称)の発足

以上、六つに分け、それぞれの問題提起者がどういう問題意識をもって提案したのか、一五一つポイントを出し合って話した。

①医療問題に対する教典・教学的な基礎づけ(問題提起者 蟹江一肇師)

○日蓮聖人は一元論(心身一如・生死一如)であるが、祈禱師や修法師は二元論(精神と肉体は分離するといふ事。靈魂の存在)である。

一、医療問題に対する教典・教学的な基礎づけリどの様なアプローチをしていくべきか(日蓮教学的なアプローチ)。

なるという考え方が多い。

○二元論・二三元論は理屈で考えず、信心の中で考え、日蓮聖人の教義を基礎にして全てを考えていく。

○自然科学的立場からすると、二元論でないと通用しないのではないか。

○宗教の目的は、相手が向上する事が目的である。向上せずにただ何かが解決しても、宗教の本当の意味は見い出せない。

○祈禱によって病が治るのは何故か。本当に祈禱で靈が供養されるのか。また、祈禱という心理療法なのか。全てを靈魂にもつていく事は問題ではないか。

○病は信念によって治る時がある。悪業の因縁をたち切って、いかに新しい人生觀を作つてやるか、心身ともに精神的強さを与えていくやり方、病を超えていく力を作つてやる事が大事である。

○いい死に方が出来る様な人生觀を与えてやる事が、法華經の大きな課題になるのではないか。

日の医療問題（問題提起者 奥田正叡師）
○日蓮宗の檀家が病院長をしている病院に、四カ寺が月に一回づつ行って法話をしている。

○日蓮聖人の教義や日蓮宗の話をする事は、思った程できない。通仏教的な話になってしまふ（様々な信仰をもつた人が入院している）。

○友人の僧侶が入院したが、同業の場合は非常にやりづらい。

○関西では改良服で病院に行くといやがられる。洋服に着替えていく。

○あるお寺の住職が献体を行なつたが、その檀信徒に聞いてみると、僧侶の献体はあまり釈然としないという。果して僧侶の献体とはどういうものなのかな。
○檀家が献体したが一年近く遺体が帰つて来なかつた。医者は捨身供養と言つていたが、人間の身体を物として扱う事に対して何となく抵抗を感じた。

○献体によって医者になれた。身体の構造が解らなければ治療もできない。解剖こそ近代医学で、この過程があつて生命の寿命が延びている事実もある。

②患者へのアプローチ・医療従事者へのアプローチ・今

○ 献体の過程があつて医学がある。解剖によつて病気の克服につながつてゐる。発展の為に身体を捧げる事はすばらしい。

○ 名古屋では献体を登録する会がある。妻は知つてい

ても他の家族の前で生呑く確認させる。どう納得させらるか。解剖の意義をはつきり述べ、その意義を説得させる。医学上の措置として進めるが、家族の反対があればやめさせる。

(3) 新宗教と病との実態・現況 (問題提起者 勝呂昌信
師)

○ 創価学会では病気になる原因は誘法であり、折伏活動が人間の幸せにつながると考えている。

○ ものみの塔は医療機関は持つていない。新宗教はどう

こでも同じだが、時代に合わせて教義が変わってく

る。例えばワクチンも三十年前は否定していたが、

今は否定しない。輸血も何年か後には否定しなくな

るという可能性もある。完全な否定形態から肯定形

態に変わりつつある。

○ 創価学会の医師の組織は強力である。開業医院の職員を学会員で固めたりするなど、学会の病院みたいな所は結構あると思う。

④ 日医研の発足 (問題提起者 柴田寛彦師)

日医研(日蓮宗医療問題研究会)は、昨年の第一一二回中央教研で提案・具体化され発足したものである。基本的な理念は次に掲げる七つの項目による諸問題を検討していく事である。

一、法華経と日蓮聖人御遺文の教えから見る生命倫理

観について

二、病気の疫学の歴史的現代について

三、宗教的見地から見た東洋医学と西洋医学の比較等について

四、診断技法と治療法について

五、靈性、遺伝、業、生死、輪廻、転生などについて

の現代科学的知見について

六、脳死、臓器移植、人工受精、尊厳死、告知、末期

医療(ホスピス等)、痴呆等の体的問題について

七、病者とその家族の教化法について

この様な七つの項目からなる諸問題に対しても、①研究

活動、②研修活動、③啓蒙活動（出版、講演など）を行
うものである。

○これを進めるについての手立て。どの様な方法でい

くのか。一般教師の意識を集めて分類し、教学者に

意見をもらいたい。

○科学的見地からみて、様々な科学的な眼からみた方

向などはどうなのか。

○具体的にはそこまでいっていない。一般教師や他方面からの様々な角度からみていく。病気の起る過

程において、どの様な教化をしていくか。また心の管理など論理のたたきあげをしていきたい。たたき台を作っていきたい。

○アンケートをとつて参考にし、また、法華経にある様に読めば病が治る、経を聞く事が治療につながるなど、御遺文から生命倫理と関わりあるものもある。

○教師はいいが、大衆にどうしていくか。各病気によつての治療法や因果関係など、また御遺文にもい

くつか病の事が載っている。それぞれの分野について説明できるのではないか。

○流行病など西洋では「神の罰」、日本では「神仏の祟り」といわれてきたが最近はない。西洋医学で克

服している。病気の種類によって仏典とかみ合わせたり、合わせなかつたりしないと難しいものである。

○基本的には、御遺文・法華経などから生命感や生死感を探つていきたい。

さらに、脳死・尊厳死についても活発な討議がなされたが、時間の都合上、納得のいく所まではいかなかつた。

以上、医療問題について様々な意見が出されたが、現段階では相当複雑である。医学上の問題についても医師同士で意見が違うという事もあり、また色々なケースがあるので答が一つという事ではない。我々も僧侶として考えていかなくてはならないという問題もあるが、今後の日医研の発足を柱として医療問題に対し、日蓮聖人の教学的基礎や仏典を通して、さらに深く追求していくかはいけないであろう。

（望月兼雄）

第七立正平和部会

座長 古河良皓

問題提起 久住謙是

記録 間宮啓允

各地報告 石田良正・梅森寛誠・吉田永正

宗祖の構築された宗教を特色づける重要な要素として

教的目標は及ぶのである。

「立正安國」という言葉で表現されている対社会的視点があることは万人のこれを認めるところである。釈尊によつて仏教がこの地球上に説きだされて以来、長き年月にわたつてそれは多くの人々の魂救済の糧として伝播され護持され続けて來た。がその反面個人の魂の救済に重きを置く余り、ともすれば我々人間が總体として形成するところの社会に対する視座が欠落しがちであつたことも、また事実として認められなければならないであろう。是の如き仏教の伝統の中には宗祖の立てられた宗教は、対社会的視座がその中心に据えられている点に

おいても、まさに画期的である。宗祖があつては成仏とう仏教徒にとっての究極的目標が単に個人の内面の次元の問題として、あるいは仏と凡夫の一対一の対応の結果としてのみとらえられてはいられない。我々凡夫が總体として形成するところの社会の次元にまでそれは敷衍され、人間社会全体加えてそれが依つて立つ国土（ここでは地球と言換えててもよいかもしない）の成仏にまでその宗教的目標は及ぶのである。

このような宗教的信念は、いきおい宗祖をして從来の仏教の系譜の中にある先師とは全く異なつた宗教活動形態を顕現せしむるところとなる。宗祖は出世間を称し、一般社会から遊離したところでの修行或いは思索といった從来の宗教活動形態をとられず、あくまでも多くの矛盾を内抱し呻吟する社会、しかし否応なく人間がその中で生きてゆかねばならない社会というものの真っ只中にあって、数多い問題に真正面から向き合い、「立正安國」という目標に向かって、しかしあくまでも仏教者として、自らの広範かつ深遠な宗教的背景の中から発言をされ実践をされたのである。

さてこの如き宗祖の姿勢を継承し、その理想を今日の社会にあって実現することを使命としている日蓮宗教師あるいはその集合体としての日蓮宗門は、宗祖の対社会的視座或いは対社会的姿勢を、より複雑化した現代社会にあってどのように理解し継承し、そして実現してゆくべきであろうか。現代社会が抱えている数多くの問題、特に核兵器、原発等に代表される核の問題、あるいは地球的大規模で進行する自然環境破壊の問題等どれ一つをとっても人類の生存を直接脅かすまつたなしの問題である。

このことを踏まえて、本年の中央教研第七立正平和部会では、問題提起者である久住師が、日蓮宗教師、また宗門として緊急にかつ真剣にこれらの問題に取り組むことの必要性、またその意義を、「立正安國」を常に口にしながらも、余りに希薄な宗門教師の危機意識、宗門組織としての余りに空洞化した取り組み姿勢に関する種々の問題点、反省点を指摘されながら強く訴えられた。

この問題提起をベースとして全国各地で実際にこれら の問題に取り組み、様々な形で実践されている各参加者

からの報告がなされ、それについて討議がなされた。具体的には、山梨の吉田師から、御自身の鬪病の経験から実感として了解されたところの命の尊厳、平等性等。宗祖が実現を志された法華經の精神を自ら継承するものとの宗教的自覚のもとに、御自坊の幼稚園の P.T.A また檀信徒、加えて地域社会までを啓蒙し巻き込む形で展開されている脱原発運動、地球環境保護運動の現況が報告された。

また兵庫の山崎師が日常生活の中で我々自身から始める環境保護運動の観点に立って檀信徒に呼びかけて行なわれている紙のリサイクル運動、また水質浄化の為の洗剤等の選択運動の現状を報告され、続いて宮城の梅森師より、御自身が宗教的使命感に基づいて実践している斎藤栄三郎元環境庁長官への諫言に代表される如き種々の反原発運動の実践報告が行なわれた（以下に続く参加者全員の討議の中で問題になつた点を要約する）。

地球環境破壊の問題を考える時に、最も重要な点は、常にこの問題を構造的に全体的視野をもつてとらえて行

かねばならないということである。地球環境の保護を謳い文句にクリーンエネルギーを自称し、その安全性に大きな疑問が種々指摘されているにもかかわらず、原発建設を強引に推進し、これを利用して、利便性・経済性のみを強調し、いたずらに消費者の購買欲をあおり、大量生産によって生ずる資源の過剰消費を招き、結果的に地球環境の荒廃を招来している国際的大資本のあくなき利益至上主義、自己拡張主義が地球環境破壊の根本要因となっている事実から目をそむけてはいけない。もしこの部分がしっかりと見据えられていなければ、水質の浄化運動、水資源保護の為の節水運動、或いは森林保護の為の再生紙利用、割箸等の不使用運動、身近では、法要に使用する卒塔婆の節約、改良の問題等、それらの真剣な努力も、そのこと自体が目的化し、ただの節約運動へと矮少化され断片化されてしまう。

つまりこれら種々の環境保護運動はいずれも対症療法的であり、我々の命をはぐくむ地球環境破壊防止の為の根本的解決策とはなり得ないのである。がこのことは決して個人個人が日常生活の中で自覚的に行う環境保護を不必要だということを意味するものではない。個々人が実質的にも、またシンボリックな意味においても、日常的に自然環境に配慮しつつ行動するということは、地球上にその命をはぐくむものとして極めて有効かつ重要なことである。ただその行動がより根本的な原因を見据え、それに対して反省あるいは自肅を求める基本的姿勢を踏えた上で、相互連関的に実行されるべきであるということなのである。

と、是の如き意見が出された反面、国際的大資本を原発の推進者、地球環境の破壊者として特定し、例えそれが事実であったとしてもそれらに対する批判を出発点として運動の展開を行うことは、宗門組織或いは教師個々人にその意識はなくとも、外部に対してはどうしても思想性、政治性を帯びたものとして映らざるを得ない。このようなレッテルは運動をより広範に展開してゆくには、かえって障害となるのではないか、私達が日蓮宗の僧侶としてなすべきは、社会体制の中の大資本としての責任を問うことではなく、あくまでもそれらを構成している人間（これらの人々も個人である時は同じ消費者、生活

者である)、個々人に対して、教化というフレームの中で自然環境の重要性を説き、その中に生きる命の尊さを訴えてゆくことが、本来的ではないかとの意見もあった。

この議論は現代社会にあって僧侶が社会問題に取り組む際に、果してどこまで、政治・国家体制というものと関り合いを持つべきであるのかという点で、極めて大きな問題を含む議論であり、以後このことに関してはより深い議論を必要とするように思われる。

次に問題となつたのは、反原発・環境保護等の問題に対する、教師がこれらに取り組む際の教師間相互の連繫に關してであつた。

この問題については、報告者各々が、個人の資格で運動を展開する際の弱点、組織運動の利点を充分に認識されつとも、その運動が組織というより大きな枠組の中に取り込まれた際に生ずる主体性・多様性の消失という弊害をも一様に指摘された。総じて参加者全員の意見としては、まず初めに組織ありきではなく、教師各々が自らの主体性をもつて個々の判断で運動を推進することを第

一義とし、これが具体的問題に際して相互の連体・情報交換の必要性が実際に生じた時、それに応じた対応が取れるゆるやかな相互ネットワーク形成が必要であるという点で一致が見られ、実際今回の教研の場にあっても報告者諸師の間で資料等を通して種々の情報交換がなされたようである。

加えて実践者の各教師が相集い、情報交換或いは相互の協調・連帯を確認し、また活動の成果を宗門にアピールしてゆく場としての教研会議の重要性が確認されたばかり、相互ネットワーク創りの手始めとして、教研の場以外に教師相互が自己の研讀の目的で自費をもって相集う場をもうける努力をすることで認識の一致を見た。

以上、中央教研会議、第七部会の討議内容のあらましを記したが、最後に、都合により、当日御欠席であった京都の石田師から被爆者援護法の早期制定を求める活動報告が文書で提出されており、その趣旨が出席者によって確認され、賛同を得たことを付記し、第七部会の部会報告とする。

(問宮啓允)